

小田原の遺跡探訪シリーズ 19

小田原城三の丸

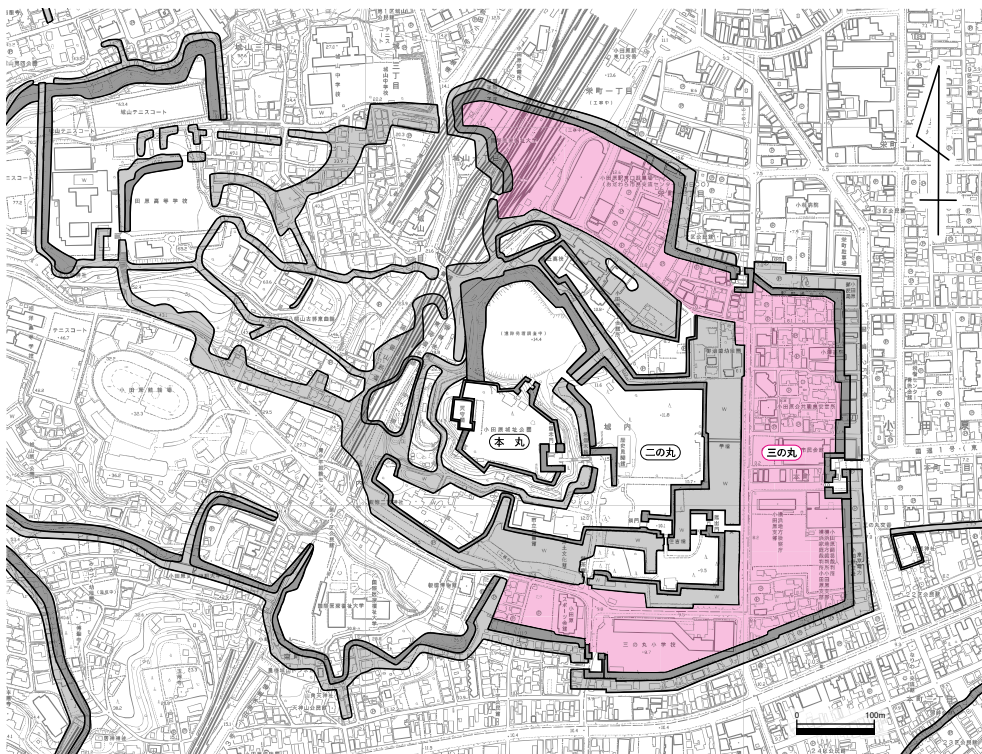
—近世武家地とその下に広がる遺跡—



小田原市教育委員会

例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」第19号として作成しました。
- 2 今号では「小田原城三の丸」として、近世小田原城三の丸域に立地する遺跡（第1図）を紹介しています。なお、第20号では小田原城の本丸・二の丸の遺跡を紹介する予定です。第15号「総構」および第18号「小田原城とその城下」と合わせ、小田原城周辺の遺跡の参考にご利用下さい。
- 3 本書の刊行は、令和5年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。
- 4 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
相原俊夫、三戸 芽、株式会社 玉川文化財研究所、小田原城総合管理事務所、小田原市立中央図書館
- 5 本書の作成は、小田原市文化部文化財課 小此木健が担当者となり、同課佐々木健策・土屋了介・加藤夏姫の協力を得ました。



第1図 本書で取り上げる小田原城三の丸の範囲

〔表紙〕 大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点の石積側溝を伴った砂利敷道路

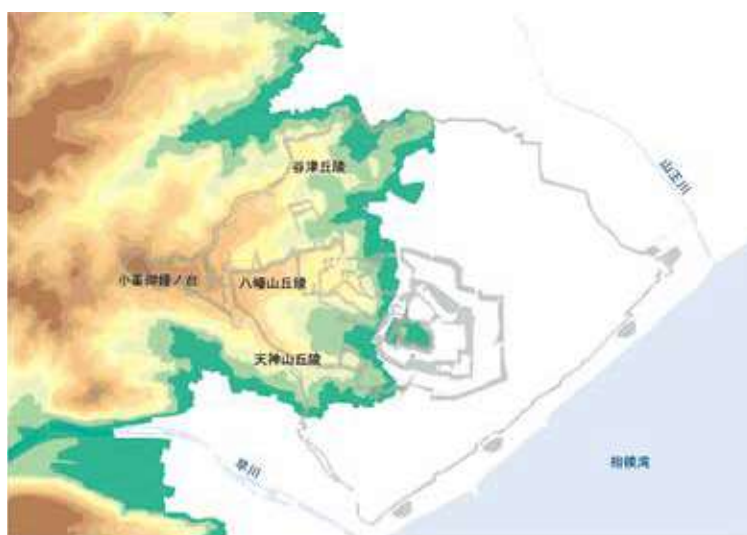
〔裏表紙〕 大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点空撮写真

I 小田原城下周辺の成り立ち

1 小田原城周辺の立地と環境

小田原城は、箱根外輪山から東に延びる丘陵先端部に位置し、南西に早川、北東に山王川・酒匂川が流れ、南東は相模湾に面しています。

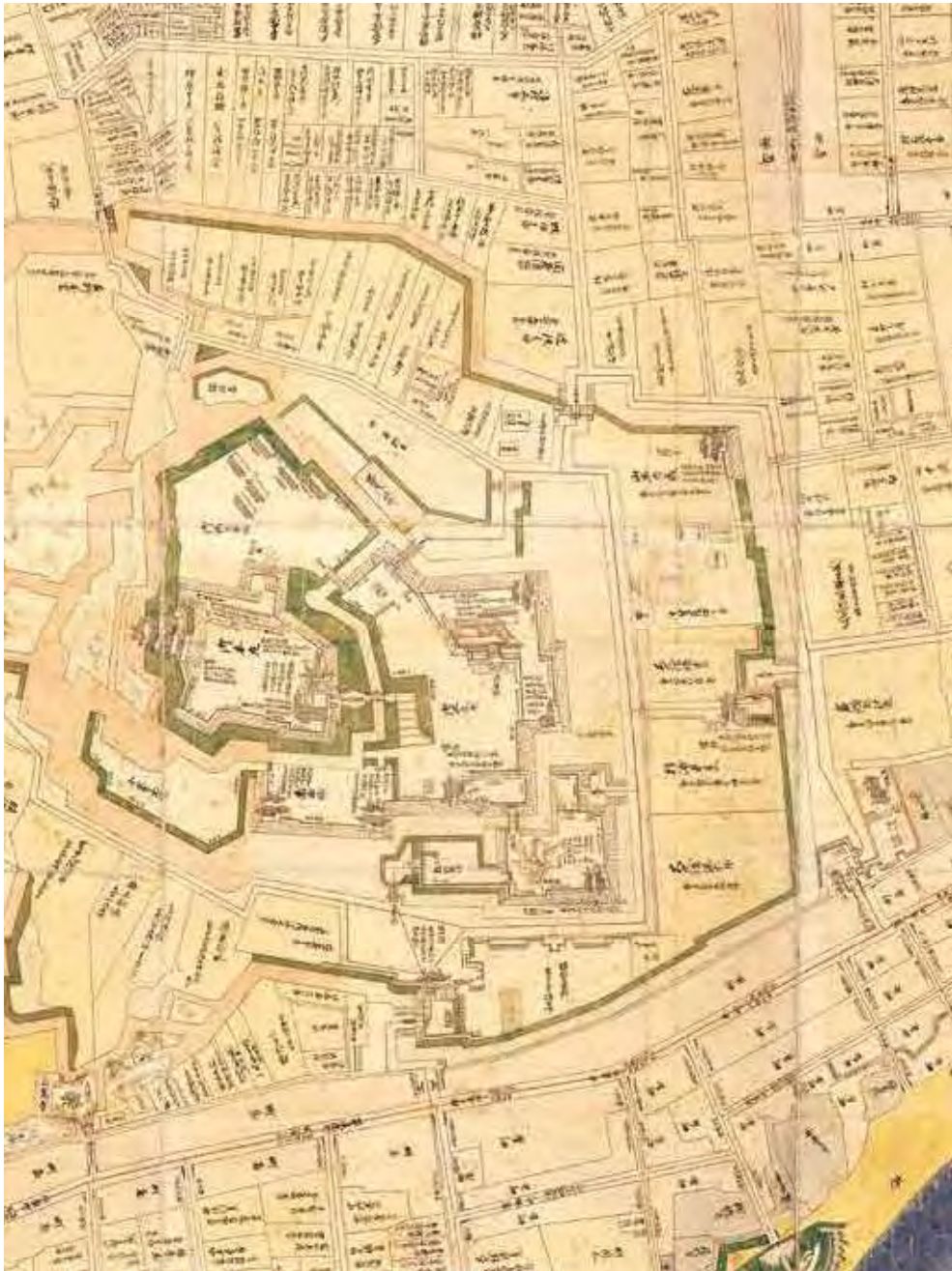
その城域は自然地形を巧みに利用して設定されており、標高123.8mの^{こみねおかねの}小峯御鐘ノ^{だい}台を頂点とした^や谷津丘陵・^{はちまんやま}八幡山丘陵・^{てんじんやま}天神山丘陵の3本の尾根とその麓に広がる標高10m前後の沖積低地で構成されています。現在、小田原城天守閣が建っているのは、八幡山丘陵先端部です。



第2図 小田原城周辺の地形

小田原城三の丸としては、丘陵部の^{はちまんやまこかく}八幡山古郭を含めた三の丸外郭内を指すことができますが、本書では八幡山丘陵から派生した丘陵裾部から沖積低地にかけて立地する江戸時代の小田原城三の丸範囲を舞台に歴史を概観します。

近世三の丸には、江戸時代の城絵図から小田原藩の歴代家老や重臣の武家屋敷が配置されていたことがわかります。この範囲の遺跡は、幕末の文久年間（1861～1864）に成立した府内図（城と城下と描いた図）である通称「^{ぶんきゅう}文久図」に記された屋敷名などをもとに、いくつかの地点に分割され、主に屋敷名で呼称されています。



第3図 通称「文久図」(三の丸部分) 小田原城天守閣蔵

2 発掘調査のあゆみ

小田原城とその周辺では、これまでに多くの地点で発掘調査が行われています。最初の本格的な発掘調査は、1971年の本丸・二の丸で行われたトレンチ調査で、鉄門では階段状遺構や石組水路、石垣の角石などが確認できました。

そして、1977年の鍛冶曲輪北堀の調査で初めて戦国時代の障子堀を検出し、戦国時代の小田原城の姿が確認されました。1980年代からは、小田原城本丸・二の丸の国史跡以外でも開発行為に伴う発掘調査が実施されるようになり、1986年に行われた箱根口跡第Ⅱ地点の調査では、江戸時代の絵図にはない堀が3本検出されるなど、現在知られる小田原城とは異なる姿の時代があったことが明らかになりました。

その後、発掘調査件数の増加に伴い、多くの情報が蓄積されたことで埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の範囲が把握され、1990年代には近世三の丸の範囲はほぼ遺跡となりました。2000年以降は東海道筋でも遺跡が確認されたことで、発掘調査が行われるようになり、小田原城下・小田原宿でくらしの人々の様子が明らかになってきました。

3 周辺の遺跡からさぐる戦国時代以前

小田原城周辺で確認されている最も古い遺跡は旧石器時代の遺跡で、八幡山古郭本曲輪第Ⅰ地点では約35,000年前の箱根畑宿産黒曜石でつくられた「台形様石器」と呼ばれるナイフ形石器が出土しています。

この他、愛宕山遺跡第Ⅱ地点で約23,000年前の「有樋尖頭器」、総構の位置にある谷津山神遺跡第Ⅱ地点では約18,000年前の礫器が15点出土しており、御用米曲輪でも石核が出土しました。

これまでに見つかった旧石器時代の遺跡は散発的なものですが、続く縄文時代になると様々な遺跡が確認されています。小田原城三の丸新堀第ⅩⅢ地点では、縄文時代前期前半の黒浜式期の土器片を含む遺物包含層が見つかり、元蔵跡第Ⅱ地点（第3次）では縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期の土器・石器、早期末～前期にかけての土器が出土しました。さらに、弁財天跡第Ⅴ地点で五領ヶ台式～中期中葉の勝坂式土器、幸田口跡第Ⅴ地点で縄文時代の土器・石器がそれぞれ見つっています。この他、天神山丘陵に位置する天神山遺跡では、縄文時代後期の敷石住居跡や土坑墓が見つかり、天神山丘陵裾部の御組長屋遺跡では縄文時代後期の住居跡が確認されています。

弥生時代では、^{すぎうらへいだゆうていあと}杉浦平太夫邸跡第Ⅴ地点で弥生時代の溝・土坑・ピット、土器集中を検出し、杉浦平太夫邸跡第Ⅰ地点と合わせ、弥生時代中期後葉・宮ノ台式土器や弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器が出土しています。元蔵跡第Ⅱ地点（第3次）でも弥生時代後期末～古墳時代の壺や甕が見つかり、弥生時代には三の丸周辺で集落が営まれ始めた可能性があります。天神山遺跡第Ⅲ地点、御組長屋遺跡第Ⅱ地点でも弥生時代後期の住居跡や土坑を検出しています。

古墳時代では、杉浦平太夫邸跡第Ⅰ地点で土坑、杉浦平太夫邸跡第Ⅴ地点で溝・土坑・ピット、土器集中が見つかり、古墳時代中期前後の土師器甕・壺・^{たかつき}高坏が出土しています。弁財天跡第Ⅴ地点では古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されており（写真1）、継続的に土地の利用が行われていたことがわかります。



写真1 古墳時代後期の竪穴住居跡（弁財天跡第Ⅴ地点）

奈良・平安時代では、元蔵跡第Ⅱ地点・弁財天跡第Ⅴ地点で奈良時代の住居跡（写真2）、幸田口跡第Ⅳ地点・杉浦平太夫邸跡第Ⅴ地点で溝、^{はんこうしゅう}藩校集成館跡では墨書土器を含む平安時代の溝が見つかり、近接した地点に集落が存在していたことが想定されています。



写真2 奈良時代の竈^{かまど}（元蔵跡第Ⅱ地点）

以上のように、小田原城の三の丸周辺には原始・古代の遺跡が広がっていることがわかりました。これらの遺跡の多くは、戦国時代以降の遺跡により削られてしまっていますが、小田原城が築かれる以前の歴史を物語る重要な遺跡と言えるでしょう。

そして、本書で中心的に取り上げるのが戦国時代・江戸時代の遺跡です。小田原城三の丸の様相は、戦国時代と江戸時代とでは大きく異なります。本書ではその特徴を紹介していきます。

Ⅱ 戦国時代の小田原城

1 北条氏による整備

小田原城が歴史の表舞台に登場するのは、北条氏初代・伊勢宗瑞^{いせそうずい}が小田原城に進出してからになります。北条氏が拠る前の大森氏時代の小田原城に伴うとされる遺構は、藩校集成館跡や幸田口跡などでわずかに溝や土坑を検出するのみです。この時期、近世三の丸にあたる一帯では、活発な土地利用はなかったと考えられます。

宗瑞から家督を継いだ二代・氏綱^{うじつな}は、小田原を本拠と位置づけ、小田原城と城下の整備に着手しました。氏綱の目指した整備プランが、小田原城周辺で得られた発掘調査成果により明らかになっています。区画を構成したと考えられる道路・堀・溝状遺構を分析したところ、ほぼすべての遺構が正方位から13度以下の同じ軸線に向いていることがわかりました。また、当時の小田原の都市景観について、天文20年（1551）に小田原を訪れた南禅寺の僧・東嶺智旺^{とうれいちおう}は、「府中小田原の町は整然と塵一つない小路^{こうじ}が整い、東南には町の麓まで海が広がっている」と法話録『明叔録^{めいしゆくろく}』に記しています。以上のような考古学的な成果と文献史料から、小田原は正方位の地割で区画された都市であったと考えることができます。

三の丸一帯は、従来、元亀年間（1570～73）以降に城域に取り込まれたとされてきました。ところが近年、多くの発掘調査により、城域に組み込まれる時期や土地利用の傾向が異なることが明らかになりつつあります。以下、時期ごとの変遷をみていきます。

16世紀前葉

八幡山丘陵から南東へ派生した丘陵頂部に立地し、近世三の丸北側にあたる元蔵跡で、掘立柱建物跡^{ほったてばしらたてものあと}（写真3）、素掘りの井戸が見つかっており、本格的な土地利用が始まったと想定されています。同じく丘陵頂部及び裾部から低地部にかけて位置する弁財天跡、幸田口跡、山本内蔵邸跡^{やまもとくらていあと}などでは、北東



写真3 元蔵跡第Ⅱ地点の掘立柱建物跡

－南西方向の溝が見つかっています。これらの遺構は概ね自然地形に則して構築されており、この時期には三の丸北側で正方位の町割は現状では確認できていません。

三の丸東側の北半にあたる山本内蔵邸跡や御用所跡は、発掘調査の結果、旧地形は浅い谷地形もしくは低湿地であることが確認されており、丘陵部以外での土地利用は遅れるようです。

三の丸東側中央にあたる大久保雅楽介邸跡では溝や石囲炉が見つかっていますが、三の丸東側の南半にあたる杉浦平太夫邸跡や大久保弥六郎邸跡では、16世紀後半以降の土地開発の影響で削平されてしまっているため、遺構を把握することは困難な状況です。

三の丸南側にあたる藩校集成館跡などでも、この時期の遺構ははっきりしません。全体的な傾向としては、自然地形に則した丘陵上を主体に土地利用されていたと考えられます。

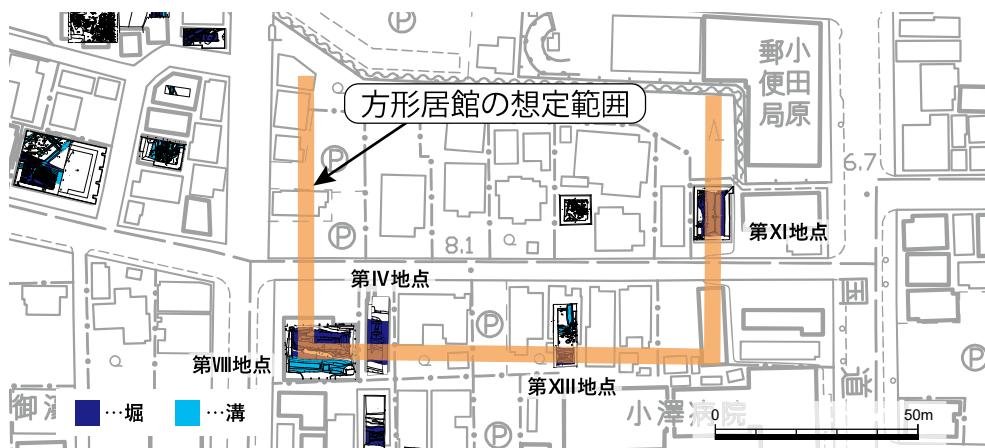
16世紀中葉

三の丸北側では元蔵跡で土坑・ピット・井戸が、弁財天跡で集石・土坑・溝などがそれぞれ分布するものの、前時期と土地利用で大きな変化はありません。一方、幸田口跡では、自然地形に応じたあり方ながら、障子堀や区画溝・素掘り井戸が構築されるようになります。

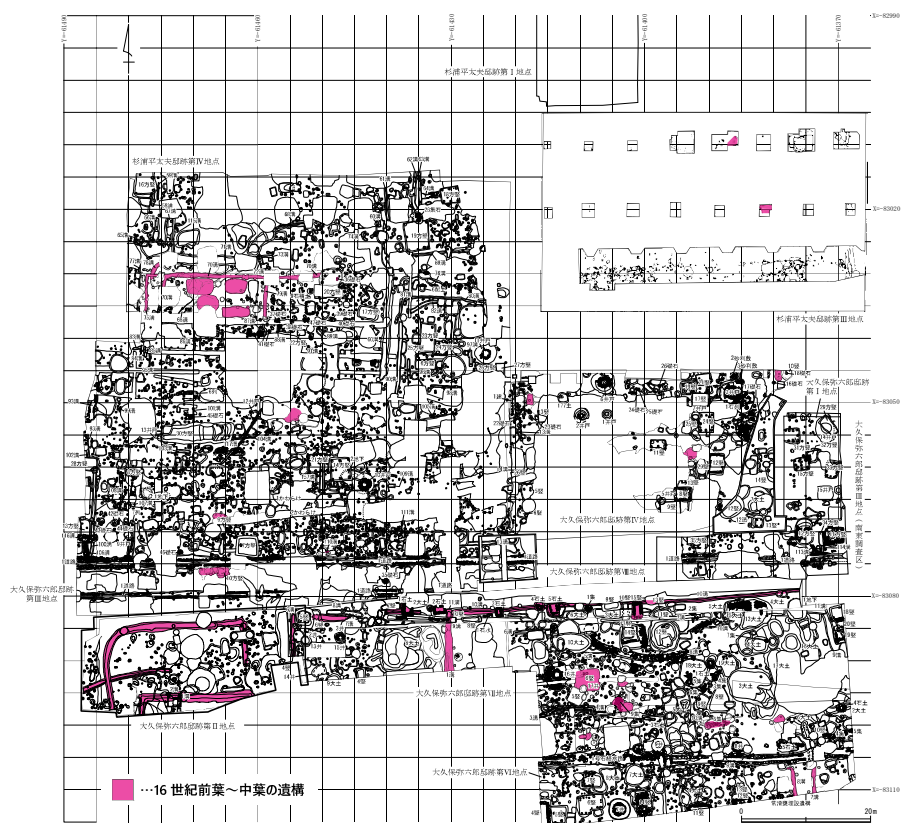
低湿地にあたる山本内蔵邸跡では、複数地点で断面がV字形をした障子堀が確認されています（写真4）。それらは「コ」の字状に展開することから、方形居館を囲む堀ではないかと想定されます（第5図）。障子堀や堀で区画された内部に位置する掘立柱建物跡などの軸向きは、東西南北の正方位を示します。同様の居館は、本町遺跡を中心に近世三の丸南東端から東海道を越えた範囲でも見つかっています。文献史料を参照すると、堀に囲まれた武家屋敷の存



写真4 山本内蔵邸跡第XI地点の堀



第5図 山本内蔵邸跡の方形居館想定範囲



第6図 杉浦平太夫邸跡および大久保弥六郎邸跡の遺構分布図（16世紀前葉～中葉）

在が想定されることから、これらの居館は武家屋敷であった可能性があります。

山本内蔵邸跡にある方形居館の南側には、^{ほうけいたてあなじょういこう}方形竪穴状遺構が集中するエリアが広がります。そのエリアを区画するように、杉浦平太夫邸跡や大久保弥六郎邸跡では東西南北に延びる溝が検出されています。

方形竪穴状遺構とは（写真7）、地面を方形に掘り下げた遺構で、壁面に石を積んだもの、床を貼った痕跡のあるもの、床で火を焚いているものなどがあります。半地下式の建物跡と推定され、主に倉庫などの貯蔵施設のほか、後段で述べるような鍛冶工房として利用されていたと考えられています。

三の丸南側では、藩校集成館跡、^{おんながやあと}御長屋跡、^{はこねぐちあと}箱根口跡で南北に走る溝や水路（写真5・6）、堀で大きく区画された空間が確認されます。水路や溝は、道路に付随する側溝とみられ、推定される道路は40～60mの間隔で配置されていたと推測されます。道路によって区画された空間には、掘立柱建物跡や方形竪穴状遺構、



写真5 藩校集成館跡第Ⅲ地点の溝



写真6 藩校集成館跡第Ⅲ地点の玉石積水路



写真7 藩校集成館跡第Ⅲ地点の方形竪穴状遺構



写真8 藩校集成館跡の空撮写真（上が北）
溝（黄アミ）で区画された空間に遺構が分布する

井戸などが分布し、屋敷地として利用されていたと考えられています（第6図・写真8）。

このように16世紀中葉になると、三の丸範囲で正方位の地割を意識した土地利用が行われていたことがわかります。

16世紀後葉

16世紀後葉を迎えると、三の丸範囲の一部では大きな造成が行われるようになります。

三の丸北側の^{もとくらぼり}元蔵堀から元蔵跡にかけて、八幡山丘陵から南東へ派生した丘陵を南北に縦断する障子堀が見つかっています（写真9）。この堀は、小田原城と城下を描いた府内図としては最も古い「相州小田原古絵図」にのみ描かれている南北方向



写真9 元蔵堀跡第Ⅱ地点の障子堀

の堀に該当すると考えられます。

幸田口跡では、前時期に掘られた溝を壊して同じ方向に深く掘り直した堀や（写真10）、前時期の堀を埋め直した上で掘り込まれた北東－南西方向の堀が検出されています。また丘陵裾部の傾斜に沿って、南北方向に「田」の字に堀障子^{ほりしょうじ}を掘り残した障子堀も新たに構築されます（写真11）。これらの堀は近世の絵図には描かれていないものです。

弁財天跡では大規模な造成は見られないものの、前時期の遺構を埋めて、井戸・溝・土坑などが掘られており、活発な土地利用があったことがうかがえます。

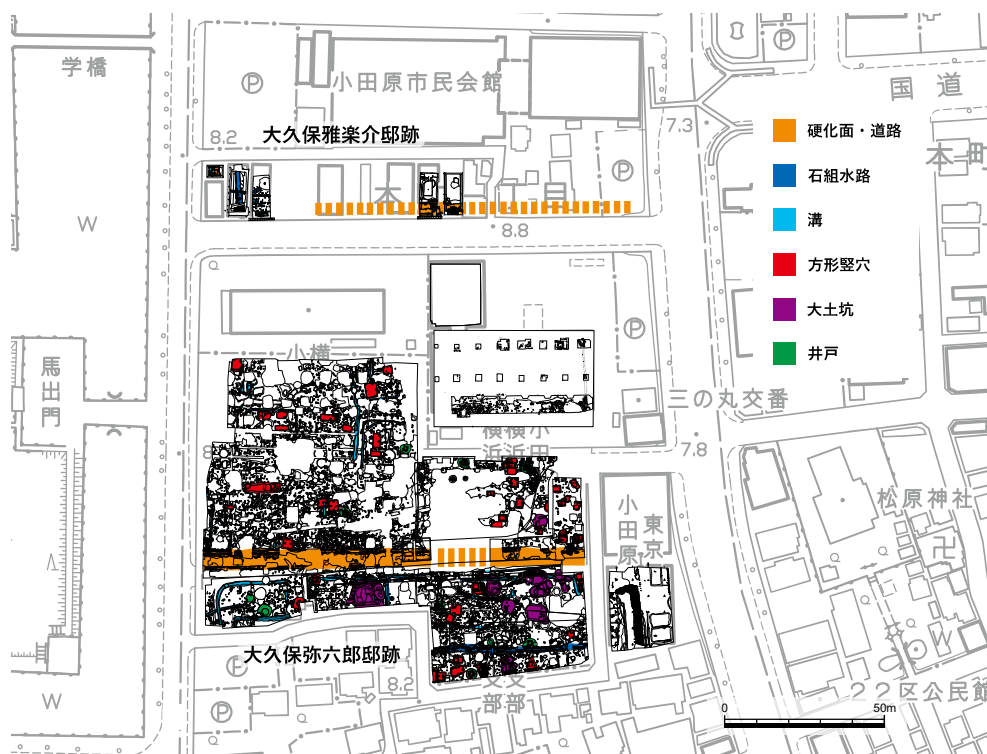
三の丸東部では、先に述べた方形居館はこの時期にも引き続き機能していたと想定され、方形居館の南側に東西方向の大きな道路が2本構築されます。ひとつは大久保雅楽介邸跡の道路（写真12）、もうひとつは大久保弥六郎邸跡の道路で（写真13）、両者の間隔は約100mを測ります。前者は近世小田原城の大手門筋にあたること、後者は道路の延長線上に松原神社が位置していることから、中世都市小田原にとって基軸となる道路であったと考えられます。



写真10 幸田口跡第Ⅰ地点の堀



写真11 幸田口跡第Ⅶ地点の障子堀



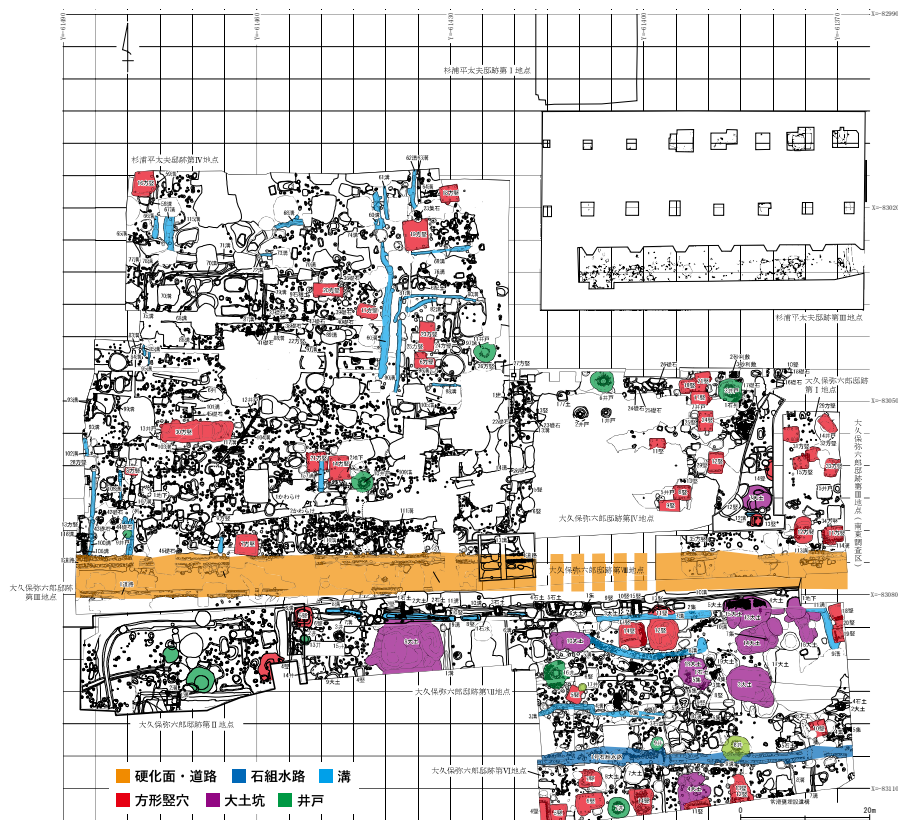
第7図 大久保雅楽介邸跡および大久保弥六郎邸跡の道路状遺構



写真12 大久保雅楽介邸跡第Ⅹ地点の道路状遺構



写真13 大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点の石積側溝を伴った道路状遺構



第8図 杉浦平太夫邸跡および大久保弥六郎邸跡の遺構分布図（後葉～末葉）

大久保弥六郎邸跡の道路は、南北に60cm幅の石積側溝をもち、表面に砂利が敷かれています。路面幅は約3.5mを測り、東西方向に一直線に敷設されています。確認されている長さだけでも約120mにわたります。正方位の地割を象徴する遺構のひとつと言えるでしょう。

この道路を中心として周辺にはさまざまな遺構が確認されていますが（第8図・写真14）、そのあり方は道路を境として南北で相違がみられます。

大久保雅楽介邸跡の道路と大久保弥六郎邸跡の石積側溝を伴う砂利敷道路に挟まれた範囲では、東西南北を区画する溝



写真14 道路周辺に分布するさまざまな遺構

や南北方向を示す礎石列、方形竪穴状遺構や石組井戸などが見つかります（写真15・16）。溝は間隔をもって配置されており、基軸となる道路とともに小路が存在していたと考えられます。また、礎石列の存在から小路には溝だけではなく、何らかの構造物が伴っていた可能性が考えられます。



写真15 大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点の方形竪穴状遺構

さらに、東西方向で約20mの間隔で設けられている石組井戸は、町割の区画規模を示している可能性があります。この区画には方形竪穴状遺構がある程度のまとまりをもって分布します。とくに大久保雅楽介邸跡の道路に近い一群では、鉄滓や石製鞆羽口、銅滓が付着した取鍋が出土していることは注目されます。これ



写真16 大久保弥六郎邸跡第Ⅲ地点の石組井戸

らの方形竪穴状遺構は貯蔵施設ではなく、工房施設であったかもしれません。周辺では土製埴塙も出土していることから、鉄精練や銅鑄造を担う職能集団が活動していた可能性が考えられます。

石積側溝を伴った砂利敷道路の南側では方形竪穴状遺構や大土坑、石組水路（写真17）、溝などが確認されています。その分布には、砂利敷道路と並行する大きな溝と石組水路の間に大土坑が集中し、石組水路の南側に方形竪穴状遺構が展開する傾向がみられます。これらの遺構を南北に区画する溝は明確ではなく、今のところ小区画は確認できていません。

道路南側には、北側では見られない石組水路や大きな溝がつくられ、さらに大土坑が集中して分布する状況から、砂利敷道路を境として空間の役割や機能が大きく異なっていたことが推測されます。

三の丸南側は、前時期から引き続き屋敷地として利用されていたと考えられます

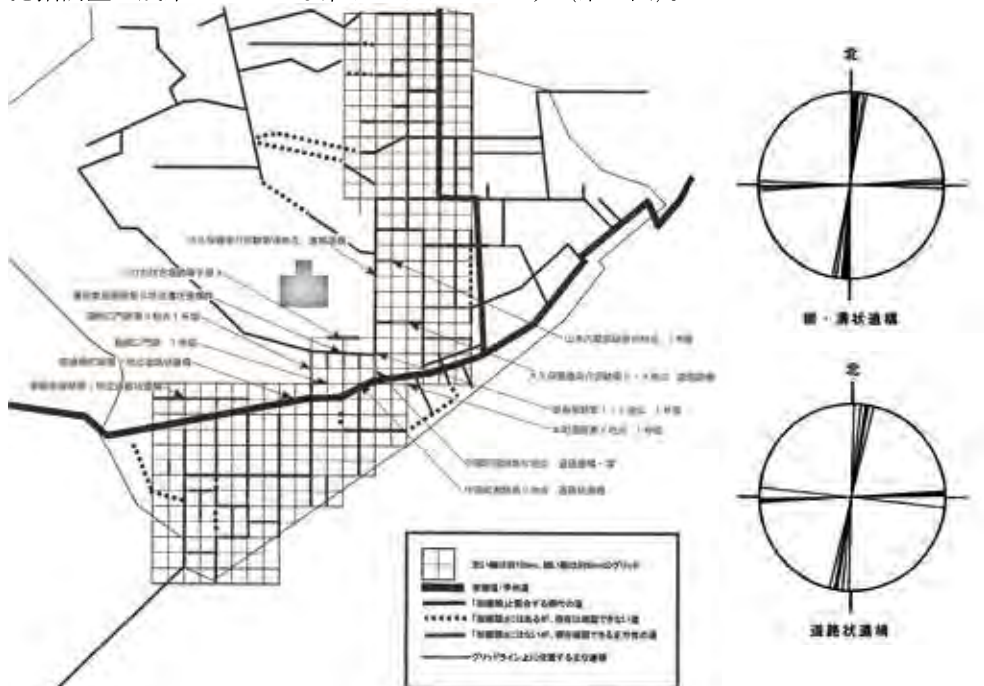
が、三の丸範囲全体の変遷を踏まえると、16世紀中葉から後葉に土地利用に大きな変化が見られます。

小田原城は、永禄4年(1561)に長尾景虎(上杉謙信)の侵攻、永禄12年(1569)に武田信玄の侵攻をうけます。従来、この侵攻を契機に改修工事が進められ、丘陵部までを取り込んだ三の丸外郭が築かれたと考えられてきました(田代 1990)。

しかし、戦国時代の低地部三の丸外郭に相当する堀や土塁は明確になっていません。代わりに、方形居館や石積側溝を伴う砂利敷道路などの存在から、方形地割に屋敷地が整然と並ぶ姿が浮かんできます。先に触れたように『明叔録』に記された都市景観が、発掘調査の成果によっても確かめられたのです(第9図)。



写真17 大久保弥六郎邸跡第Ⅵ地点の石組水路



第9図 16世紀の小田原模式図と遺構軸(佐々木2019より転載)

Ⅲ 近世の小田原城

1 大久保氏による三の丸外郭の整備 ―前期大久保時代・番城時代―

天正18年（1590）の小田原合戦を経ても小田原城と城下は、大きな被害を受けることなく健在でした。北条氏が去った小田原には、徳川家譜代の家臣である大久保忠世おおくぼただよが入城しました。この時期を前期大久保時代と呼んでいます。新たに小田原城主となった大久保忠世は、入城後まもなく小田原城の改修に着手します。

三の丸一帯では、三の丸東堀や幸田口跡などで前期大久保時代に相当する玉石積みの石垣が見つかっています。さらに、箱根口跡では戦国時代の遺構を壊して新たに造られた障子堀（写真18）、元蔵堀跡ではこの時期に造り始められたものの、未完成のままとなった堀が確認されています。このことから、大久保氏は戦国時代の小田原城を継承しつつ、整備・強化を施し、近世小田原城の原形をつくったと評価できるでしょう。

しかし、慶長19年（1614）に二代目・大久保忠隣おおくぼただかが改易となったことに伴い、小田原城は破却されることになります。三の丸では元蔵堀で堀コーナー部分にのみ土塁破



写真18 藩校集成館跡第Ⅲ地点の障子堀

却に伴う埋土が確認され、先の箱根口跡の障子堀も破却に伴って埋め立てられたと推測されています。破却が確認される地点は限られることから、戦国時代以来の城郭全体には破却が及ばず、局所的・象徴的な部分にとどまったと考えられています。

大久保氏改易後、小田原城は幕府城代が管理する番城ばんじょうとなります。元和5年(1619)から同9年(1623)まで阿部正次あべまさつぐが城主となりますが、阿部氏転封後は再び番城となりました。二度目の番城時代には、將軍職を家光いえみつに譲った徳川秀忠とくがわひでただの小田原城隠居計画が進められていたことが指摘されています。この計画は秀忠の死去により中止になりますが、小田原城と城下ともに具体的な改修の痕跡は今のところ確認されていません。

2 近世小田原城の完成 ー稲葉時代ー

寛永9年(1632)に小田原城主となった稲葉正勝いなばまさかつは、寛永10年(1633)に小田原城の改修に着手します。ところが、直後に大地震に見舞われ、小田原城と城下は壊滅的な被害を受けてしまいました。被災した小田原城は、翌年に上洛する將軍家光の宿所となっていたため、震災からの復旧だけではなく、宿所としての設備拡充を目指した改修が迅速に実施されました。

三の丸一帯では、城門・堀・土塁をはじめ、家老屋敷や藩役所である御用所が配置



写真19 三の丸東堀第Ⅱ地点の慶長期と寛永期の石垣



写真20 三の丸南堀第Ⅶ地点の石垣

されました。大手口が現在の位置に移され、前期大久保時代に造られた三の丸東堀は、南側のクランクを直線的に改めます（写真19）。

また、東海道の付け替えとこれに伴う城下町割の変更とともに石垣を伴う三の丸南堀（写真20）が正方位から約25度振れた位置に設けられました。一連の改修を通して、小田原城は本格的な近世城郭としての外観を整え始めたと言えます。

さらに、延宝元年（1673）から延宝3年（1675）頃までの間にも大改修が行われました。この改修で、本丸・二の丸の総石垣化、櫓の増設と各門の櫓形化・櫓門化が実施される中で、三の丸には馬屋曲輪・南曲輪とともに石垣が付加されました。西に谷津口門、北に幸田口門、南に箱根口門、東に大手門を構えた堀と土塁、城壁で区画された三の丸が整備され、ここに近世小田原城が完成しました。

3 度重なる災害と小田原城 ―後期大久保時代―

貞享3年（1686）に大久保忠朝が入封し、72年ぶりに大久保氏が小田原城に復帰し、幕末まで続きます。この時代を後期大久保時代と呼んでいます。後期大久保時代には、元禄16年（1703）の元禄地震をはじめとする地震災害、宝永4年（1707）の富士山噴火による火山灰降下という大規模災害に見舞われます。

元禄地震で小田原城は大破・炎上し、天守・本丸御殿・二の丸御殿をはじめとする



写真21 断面に投げ棄てられた宝永火山灰や焼土がみられる大土坑
多くの施設が倒壊・焼失し、石垣・土塁も崩壊し、壊滅的な被害を受けます。

宝永の富士山噴火では、領内に多くの火山灰が降り、酒匂川が決壊するなど甚大な被害がありました。杉浦平太夫邸跡・大久保弥六郎邸跡では、宝永火山灰や焼土を投げ棄てた大土坑が確認されています（写真21）。

嘉永^{かえい}6年（1853）の地震では、天守や二の丸御殿などが大破し、武家屋敷の多くが倒壊しました。三の丸では御用所や山本内蔵邸が全半壊の被害を受けました。

度重なる災害に遭遇し、復旧・復興が重い負担となっていた藩財政は窮乏していたため、小田原城自体の大規模な改修は行われず、明治時代を迎えることになります。

4 近世三の丸と武家屋敷

近世三の丸は、小田原藩重臣の屋敷や藩役所が連なる重要な地域でした。しかし、関東大震災により、残る武家屋敷の建物は失われてしまい、往時の姿を偲ばせるものは残されていません。そのような中、杉浦平太夫邸跡・大久保弥六郎邸跡などでの発掘調査成果から武家屋敷のあり方の一端をうかがい知ることができます。

大久保弥六郎邸跡では、門の親柱^{おやばしら}に相当する礎石^{そせき}2個が確認されています。控柱^{ひかえばしら}の痕跡がないことから、腕木門^{うでぎもん}（腕木と呼ばれる梁で屋根を支える門）で、潜戸^{くぐりど}を脇堀^{わきべい}に設けていたと推測され、上級武士の家格を表した門構であったと考えられます。

この門構は、明治期に撮影された小田原藩の武家屋敷・近藤外記邸^{こんどうげき}（現在の報徳博



写真22 近藤外記邸古写真

(「ODAWARA CASTLE」1872年、メトロポリタン美術館所蔵『Views and Costumes of Japan』所収)

物館付近)の古写真でも確認できます(写真22)。写真に写る門は瓦葺き・切妻造で、親柱と棟位置から棟門(2本の門柱に屋根をのせた門)か腕木門とみられ、左側の脇堀に潜戸を設けています。大久保弥六郎邸の門も同じような姿であったと推測されます。

さらに、門左手に茅葺・入母屋造の建物も見られます。堀に続く位置にあることから長屋と考えられます。武家屋敷ではこのような長屋に家臣を住まわせていました。

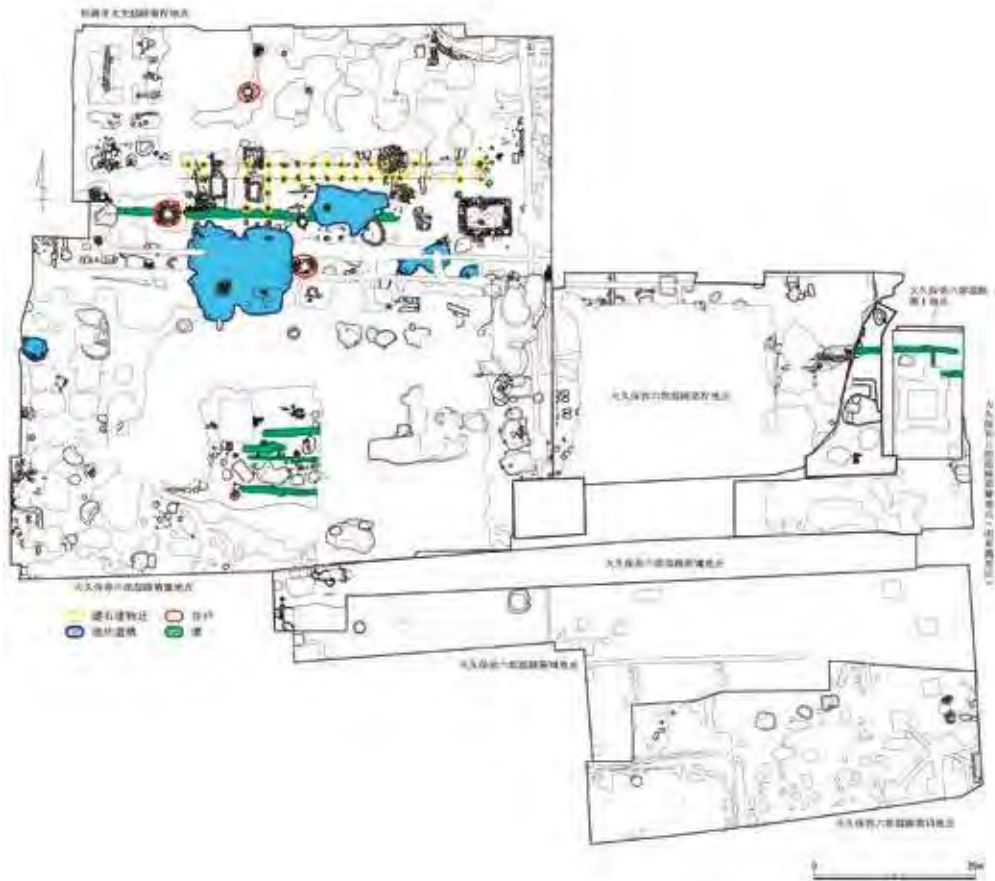
近藤外記邸の古写真には主屋も写っており、長屋とともに茅葺であることがわかります。杉浦平太夫邸跡・大久保弥六郎邸跡の発掘調査で、瓦の出土がとても少ないことを踏まえると、小田原藩の武家屋敷は茅葺が主流であったと想定されます。

また、近藤外記邸の主屋で門正面に当たる位置には千鳥破風がつけられています。破風は家格の高い家にのみ許されたものであり、三の丸武家屋敷には入口側の屋根に破風が配されていたことでしょう。近世三の丸には、堀端道路に向けて腕木門と長屋が連なる外構をもち、茅葺の主屋に家格を示す破風をのせ、豊かな池庭を設けた武家屋敷の建ち並ぶ壮麗な景観が広がっていたと思われます。

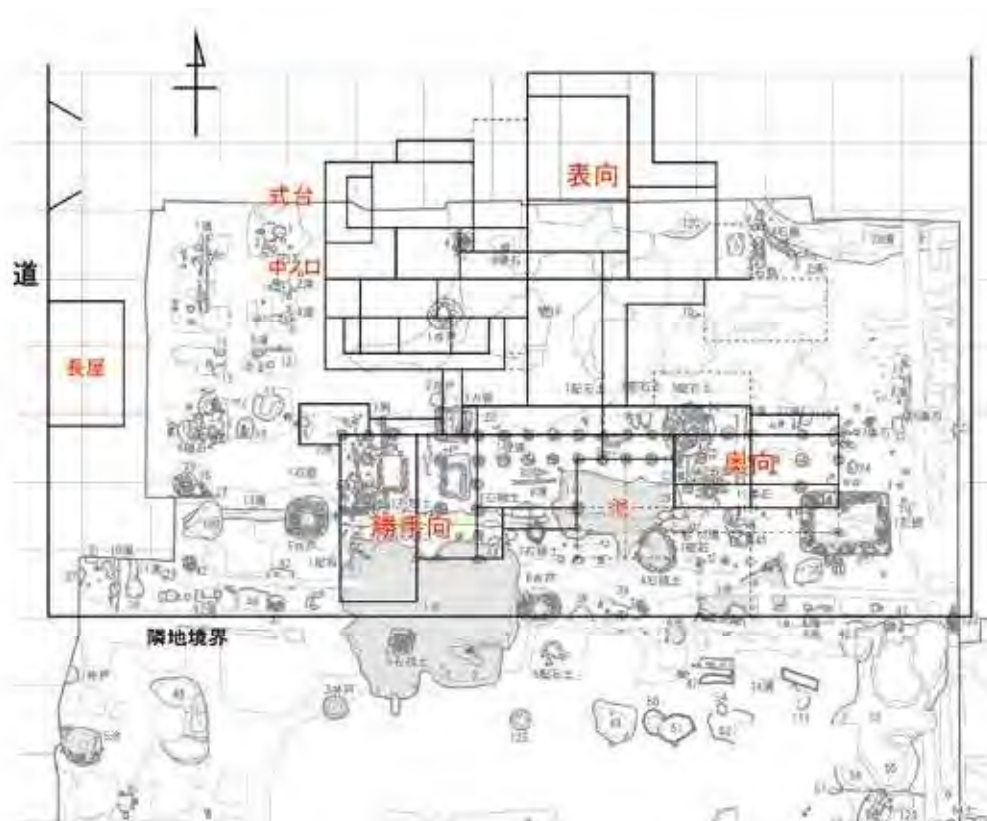
杉浦平太夫邸跡では、武家屋敷における建物や池庭などの敷地配置を垣間見ることができます。主屋とみられる東西35m以上の礎石建物跡(写真24)、土蔵跡、池状遺構、井戸などが検出されています。敷地全面を調査していないことに加え、調査範囲

では攪乱^{かくらん}も激しいため、残念ながら全容はわかりませんが、主屋や池庭などは敷地西半に収まり、東半には主要な建物は展開していないようです。

発掘調査の成果だけでは探ることができない、かつての杉浦平太夫邸主屋の平面構成ですが、近代史料との照合・検討から、その復元がなされています（小沢 2021）。それによると、主屋の北西側が入口にあたり、西面北端に式台、その南に上り段が設けられています。式台の奥が表向の空間に相当し、主屋南東部が奥向、南西側が勝手向に該当すると推測されています。池が奥向の中庭に、井戸が勝手向の西側に配されました。さらに、方形竪穴状遺構（写真23）が勝手向の板敷の床下または土間にあたる箇所であり、日常的な収納に用いられていたとみられます。



第10図 杉浦平太夫邸跡及び大久保弥六郎邸跡の江戸時代後期～幕末の遺構分布
（玉川文化財研究所 2017より転載の上、一部加工）



第11図 杉浦平太夫邸跡の復元平面配置図（小沢2021より転載、一部加筆）



写真23 方形竪穴状遺構



写真24 礎石建物跡

IV 幕末から近代へ

1 杉浦平太夫邸のその後

杉浦平太夫邸は、三の丸武家屋敷が幕末から近代にかけてどのような変遷を辿ったのか、その一例を示してくれます。

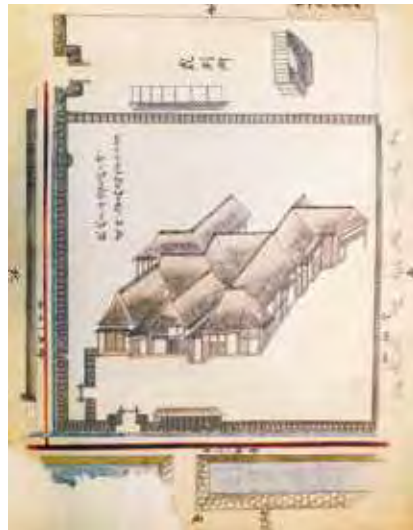
江戸時代後期の文化14年（1817）に発生した火災で焼失した後に建て替えられた杉浦邸は、明治2年（1869）の版籍奉還後、藩知事邸として利用されるようになります。明治4年（1871）7月の廃藩置県で小田原藩が廃止されて小田原県（同年11月足柄県に改組）が誕生すると、藩知事の免職で空き家となります。明治9年（1876）4月に相模国4郡が神奈川県に合併されると、旧杉浦平太夫邸に神奈川県小田原支庁が設けられることになります。

明治11年（1878）に小田原支庁は廃止されると、建物と敷地の^{かふ}下附を受けて、明治12年（1879）に女子高・幸学校が開校しました。しかし、明治25年（1892）の火災で焼失しました。

このように杉浦平太夫邸は、藩知事から神奈川県小田原支庁へ、さらに幸学校へと転用されていきます。この変遷の中で大きな災害がなく、かつ使用において長い空白期間がないことから、建物は幕末の屋敷がそのまま使い続けられたとみられます。

幸学校の姿は「幸学校図」（第12図）から確認できます。城内の櫓や門は明治5年（1872）、二の丸御殿は明治9年（1876）という明治時代の幕開け早々に解体・売却されたのに対し、杉浦平太夫邸は明治25年（1892）の火災焼失までその姿を保っていたのです。

杉浦平太夫邸は、その役割を変えながらも、近代の世に三の丸武家屋敷の面影を強く遺^{のこ}していたことでしょう。今後、発掘調査の成果が積み重なることで、近世から近代にわたる三の丸の新たな姿が浮かび上がってくるかもしれません。



第12図 幸学校図『教育資料（建物図面）』
岩瀬家文書、小田原市立中央図書館蔵

		和 暦	西 暦	事 項
中 世	北条時代	14世紀		はじめて「をたはら（小田原）」の地名が登場する
		文亀元年	1501まで	伊勢宗瑞が小田原城を支配下におく
		永正15年	1518	氏綱が早雲より家督を継ぐ
		大永3年	1523	氏綱、伊勢から北条に改姓する
		天文10年	1541	氏綱没し、氏康が家督を継ぐ
		永禄2年	1559	氏政が家督を継ぐ
		天正8年	1580	氏直が家督を継ぐ
	前期 大久保時代	天正18年	1590	小田原合戦 北条氏が豊臣秀吉に小田原城を明け渡す 氏政と弟の氏照、自刃、氏直は高野山へ追放となる 大久保忠世が小田原城主となる
		天正19年	1591	氏直、赦免される。一万石を与えられ、秀吉に出仕するも病没する
		文禄3年	1594	大久保忠隣が城主となる
		慶長5年	1600	関ヶ原の戦い
		慶長8年	1603	徳川家康、征夷大將軍となる（江戸幕府の成立）
江 戸 時 代	番 城	慶長19年	1614	忠隣が改易され、小田原城は幕府管轄の番城となる
		慶長20年	1615	豊臣氏が滅亡する（大坂夏の陣）
		阿部 元和5年	1619	阿部正次が藩主となる
	番 城	元和9年	1623	再び番城となる 小田原城を二代將軍徳川秀忠の隠居城とする計画が立てられる
		稲葉時代	寛永9年	1632 稲葉正勝が藩主となる
	後 期 大 久 保 時 代	寛永10年	1633	小田原城の修築が始まる 寛永小田原大地震により修築中の城と城下に大きな被害がでる
		延宝3年	1675	小田原城の修築が完了する
		貞享3年	1686	大久保忠朝が藩主となる
		元禄16年	1703	元禄小田原地震により小田原城は天守を含むほとんどの施設が倒壊・消失する
		宝永3年	1706	小田原城天守が再建される
		宝永4年	1707	富士山が噴火（宝永噴火）
		宝永5年	1708	前年の富士山噴火の被災地が幕領となる
		享保元年	1716	享保の改革が始まる
		延享4年	1747	幕領となっていた村々の大半が小田原藩に復帰する
		天明7年	1787	寛政の改革が始まる
	大 正 時 代	文化3年	1806	飯盛女設置
		文化14年	1817	大火で小田原宿の80％が灰になる
		文政2年	1819	大火で町屋が焼失
		天保12年	1841	天保の改革が始まる
		嘉永5年	1852	小田原の海岸に3台場が完成する
明 治	大 正	嘉永6年	1853	ペリーが浦賀に來航する
		慶応4年／明治元年		戊辰戦争が始まり、明治新政府が成立する
		明治3年	1870	小田原城の天守・櫓などが売却され、解体される
		明治4年	1871	廃藩置県により小田原藩が廃止され、小田原県が設置される
		明治23年	1890	小田原城跡が陸軍省より元藩主大久保氏に払い下げになる
		明治29年	1896	人車鉄道が小田原―熱海間を結ぶ
		明治34年	1901	小田原城内に御用邸が落成する
		明治35年	1902	小田原大海嘯
		大正9年	1920	東海道線小田原駅開業
		大正12年	1923	関東大震災 天守台、本丸、二の丸の石垣が崩落

第1表 本書に関連する中世・近世・近代の歴史関連年表

文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。小田原城三の丸についてさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

小沢朝江	2021	「建築史からみた近世小田原城下の武家屋敷」『ホール下に広がる小田原藩重臣の武家屋敷』資料集 小田原市教育委員会
小田原市教育委員会	2021	『ホール下に広がる小田原藩重臣の武家屋敷』資料集 小田原三の丸ホール開館記念遺跡講演会
小田原城天守閣	2012	『戦国最大の城郭 小田原城』小田原城天守閣特別展図録
小田原城総合管理事務所	2018	『シンポジウム 小田原北条氏の絆』
小田原城総合管理事務所	2018	『シンポジウム 戦国都市小田原の風景』
小田原城総合管理事務所	2018	『小田原開府五百年のあゆみ』小田原天守閣特別講演会
佐々木健策	2019	「中世・近世の拠点「小田原」」『拠点にみる相武の地域史—鎌倉・小田原・横浜—』地方史研究協議会第69回（神奈川）大会成果論集 雄山閣
佐々木健策	2024	『戦国期小田原城の正体—「難攻不落」と呼ばれる理由』吉川弘文館
田代道彌	1990	「小田原城と城下の移り変わり」『小田原城とその城下』小田原市
玉川文化財研究所	2017	『小田原城三の丸 杉浦平太夫・大久保弥六郎邸跡—小田原北条時代と小田原藩政時代屋敷跡の調査—』

小田原の遺跡探訪シリーズ19

小田原城三の丸

—近世武家地とその下に広がる遺跡—

令和6年（2024）2月15日 印刷

令和6年（2024）2月29日 発行

編 集 小田原市教育委員会

発 行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電 話 0465-33-1715

URL：https://www.city.odawara.kanagawa.jp

E-mail：bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印 刷 有限会社 石橋印刷

